

人生の贈りもの

京大人文科学研究所所長 山室信一(63)

8

満州国の失敗に学べることもある

—京大人文研の助教時代
に初めて雑誌に書いた中央公論
「最後の『満州国』ブームを眺
む」(1989年)は37歳のと
きでした。

東大の助手になったばかりの
ころ、師事した政治学の石田雄
教授から「40歳までは新聞や雑
誌のメテアに書かず、資料読

みに徹するように」との助言を
いただきました。少し早かった
かも知れませんが、当時は映画
「ラストエンペラー」が話題に
なっていて満州国を捉え直した
という思いがありました。いつ
から関心を持ったの
ですか。

大学時代、満州国建国に奔走



「キメラ 満州国の肖像」などの著書は海外での関心が高く、ハン
ガルや英語などに翻訳されている。東京都左京区、桐本マチコ撮影

した人物を描いた「笠木良明遺
芳録」を読んでからです。本
からにじみ出ている怒気の様
々なにかにたじろぎました。研
究者になって、アメリカや中国
でも資料を集めました。

—その後、建國に携わった
日本人にインタビューを重ねて
単行本「キメラ 満州国の肖
像」(93年)を出しました。

キメラはギリシャ神話に出て
くる怪物です。頭は獅子、胴が
ヒツジ、尾は竜。それぞれ関東
軍、天皇制国家、中国皇帝と近
代中国になぞらえました。かつ
て学徒出陣して満州で戦車連隊
におられた司馬遼太郎さんから
「叙述・内容みごとなもの」
「電磁石に吸いつけられるよう
な思いでした」というほがきを
いただきました。励みになりました。

書いていることと実像とにズレ
はないかと不安でしたから。

満州国は日本が戦前、中国東
北部につくった多民族国家で
す。漢族や満族、日本人など三
十数民族が協和するユートピア
国家をめざしましたが、無残な
失敗に終わりました。最大の原
因は、協和を掲げながら日本人
が指導民族としての優越感から
自由になれなかったことです。

—執筆に4年かけました。
中公新書の名物編集者だった
早川幸彦さんが担当してくれま
した。200字の原稿用紙で50
枚ほど書くたびにまとめて郵送
しました。あちこち赤字で疑問
点を示して送り返され、私もそ
れに答えるようにまた書く。あ
いまいに書いていた部分が明確
になっていきました。文章作法

を教えてくださいました。
—この本で吉野作造賞を受
賞しました。

いまでも読者から手紙をいた
だきます。京大近くの百万遍に
あった銀行で順番待ちをしてい
て名前を呼ばれたとき、脇から
現れた方から「キメラ」の山
室さんですか？ 私の父は満州
から帰ってきて」と声をかけら
れて話し込んだことがあります。
病院でも同じような経験が
あり、読んでいただいているん
だなあと。ありがたいですね。

—満州国の失敗から私たち
が学ぶべきことは、
日本がいかなる国家としてア
ジアで存在するべきかを考える
素材になるはずです。日本国内
だけを考えてもいけません。い
ま日本に外国人が200万人ほ
ど住んでいる。岐阜県の人口と
ほぼ同じ。といえ、日本も多
民族国家というイメージを持っ
てもらえるかも知れません。